

される土壤病害が多発する危険性をはらんでいる。その結果、これを抑えるため、塩基類の施用をひかえ、土壌 pH を低くおさえて栽培を続けているため、年々外観が悪くなると共に収量も低位安定化傾向にある。これは「農林一号」という秋作用としては休眠の長さや生産力の点で必ずしも最適でない品種を用いていることにもその原因があると考えら

れる。

これらの事柄が原因で関西市場における広島バレイシヨの評価は年々低下傾向にあり、量に加えて質の面でもライバルの長崎県に大きく水をあけられているのが現状である。

このような状況を考慮して、今後も特長のある良質な広島バレイシヨの生産を目指した技術開発を続けてゆく必要があると考える。

いも・つれづれ草

〈ボン・ヌフ〉

大学の休みを利用してヨーロッパを回った息子が、スポンサーへの心遣いか、セーヌ川にかかっているボン・ヌフ橋やその袂にあるアンリ4世の写真を撮ってきた。ボン・ヌフは「新橋」の意味であるが、実はパリー1番の古い橋で、アンリ4世時代の1603年に落成したもの。アンリ4世がフライドポテトを好んだので、アンリ4世の像のある橋にちなんで、人びとはその好物をボン・ヌフと呼ぶようになった。

ボン・ヌフことフライドポテトは、昔ボン・ヌフ橋付近の屋台店などで売られていたが、今もパリーの街角で人気が高い。わが国のカウチポテト族はチップスが大好きのようなが、パリーっ子はボン・ヌフと言う揚げポテトが大好き。

揚げポテトの形にはいろいろあって、薄く輪切りしたポテトチップスもその一種。1cm角の拍子木に切ったものがボム・フリットで、これより少し小ぶりにしたのがボン・ヌフ。さらにもう少し細めにミニョネット(ステック)、もっと細くマッチの棒状にしたのがアリュメット(シューストリング)となる。この外、ダイス状のオブラインもある。粉吹きジャガイモのカロリーは御飯の半分ほどで、美容食となるが、油で揚げたのはカロリーが高い。欧米の中年女性はわが国の女性に比べ体重の豊かなのが多いのは、揚げもの好きに関係あるのかも知れない。

サマセット・モームの『三人の女』にもフレンチフライが大好きな女性が出てくる。太り過ぎて悩む3人の女性が、食事療法に励もうということになり、バター塗りのトーストや甘い飲物を控えて我慢する。3人ともトランプ遊びが大好きで、もう1人の痩せた女性をメンバーに加えることにした。この女性、3人の前でフライドポテトなどをムシャムシャ食べ、クリーム入りのお茶を飲み続けたからたまらない。ついに3人は我慢しきれず、怒り狂い、泣きわめくことになる。痩せた女が帰ったあと、飢えた狼のようにビールを飲み、フォグラ、エクレーなどを口に突っ込む……と

言う話であった。

〈じゃがいもと映画—その4〉

○さらばバルデス

1973年、米・仏・伊合同作品。1880年代アメリカはニュー・メキシコ州における話。荒野の一軒家に飼われていた混血馬に乗っているルイーズ(ジル・アイアランド)に向かってチノ・バルデス(チャールス・ブロンソン)が投げた言葉、

『ジャガイモをつめた袋でもないだろう』

これは、乗馬がサマになっていないことを言っている。つまり、両足の膝で馬の腹をしっかり締めてもいないし、両足に体重をかけてもいないのを見て、ブロンソンが馬鹿にしている。

ジャガイモからの連想は、どの国でもよくない。ヘミングウェイの短編『キリマンジャロの雪』でも、「……ふと立ち寄ったカフェでは、あのアメリカの詩人が、前にコーヒーの皿を積み上げ、ジャガイモみたいな顔に、まぬけな表情をうかべて……」というのがあり、阿刀田高のある文にも、「公園のベンチはもちろん、電車の中や喫茶店などでベタベタしている2人連れをよく見ると、女は水準以下のご面相。男は芋でも飲み込んだような馬鹿づら。……日本の抱擁シーンはまだ揺らん期で、やがて美しく変貌する日が来るだろう」とあった。

この芋は何芋か知らないが、英語からも拾ってみると、

ポテト・ノウズ……魅力的でない鼻のこと。

スモール・ポテト……取るに足りない、つまらぬもの。つまらぬ人。

ミート・アンド・ポテト・マン……肉の取り合わせにはジャガイモしかないと思っているような、単純で面白味の欠ける、真面目くさった人をいう。

こんなジャガイモであるが、ふるさとの香りが豊で、内に秘そめたのがあり、個性的で味のあるものに使うこともある。戦中派はジャガイモから「代用食」、「戦争」(戦中、戦後)、「開拓」などを連想し、若くなると、「土」、「素朴」、「故郷」、「美容食」を連想する人が多くなる。

(北海道立中央農業試験場 主任研究員 浅間和夫)